さざなみ国語教室
第494号　2023年5月25日
発行者代表　吉永幸司
連絡先　大津市柳川2-11-5
℡ 077-522-1008
発行所　滋賀児童文化協会
NPO 現代の教育問題研究所

鬼と戯れて

村上政市

息子を通したご縁でこうして投稿させていただく機会を得ましたことありがとうございます。

寄る年波には勝てず体調を崩すことが多くなり原稿が遅れ申し訳ありません。

私は昭和五年生まれで九十二歳になります。まだ、戦前の教育制度が残っていた時代に旧制中学校を五年で卒業し金沢高等師範学校を卒業し高校教師になりました。富山県と京都府で地歴科の教師として三十九年間勤務しました。

定年で退職しのんびりしようと思っていた矢先、大江町がへき地振興の拠点として「日本の鬼の交流博物館」を建設することになり準備室の段階から関わることになりました。鬼について何も知らなかった私です。「鬼」と名の付くものなら何でも調べていきました。そして、気づいたら八十になっていました。今でも「名誉館長」の称号をいただきこの歳になりましても「鬼とは」について尋ねられます。ありがたいことだと思っています。

標題に「鬼と戯れる」と書きましたが、正月から二月にかけてのこの時期、全国各地の鬼がゾロゾロと現れてきます。鬼を追跡してきた私にとりましていつまでたってもワクワクする時です。

鬼というと凶悪怪異な悪者をイメージしますがもともと日本の鬼は年や季節の変わり目に異界から現れ、子孫に富や幸福をもたらし、一方でこの世の災厄やけがれを持ち去ってくれるものと考えられてきました。秋田のナマハゲなどはその典型で、民俗学者の折口信夫（おりぐちしのぶ）は、そんな鬼を「春来る鬼」と名付け、日本の鬼の典型と考えました。学者のなかには、多様な考え方があり「鬼は悪者」との説を説かれる方もありますが、すべてのものに神が宿る、手を合わせるといった寛容さこそが私たち日本人の特色であり「春来る鬼」を生み出したと思っています。

「来年のことを言うと鬼が笑う」という諺が示すように、先人たちは鬼を禍福を支配するものととらえ、鬼に人間の力を超えたものへの畏怖の情を託し、傲慢な心への戒めとしたようです。

今、私たちは高度な文明の中で生き、多くの恩恵を受けていますがその反面、ともすれば人間優先を過信し、畏怖の心を失いがちです。畏怖の心から謙虚な心、敬愛の心を育てることで思いやりの気持ちも芽生えてきます。

また、次々に起こる忌まわしい出来事は，目に見えぬものを切り捨て、畏怖の心を忘れていることが根底にあるように思えます。先人が「春来る鬼」に託した心情をこの時期、ひととき振り返る機会にしたいものだと思っています。

いつお迎えがあってもおかしくない歳になりましたが、最後まで鬼を追跡していきたいと思っています。

（前・日本の鬼博物館館長）

さざなみ

▼4月から5月へと学校が動いています。4月の学校は、落ち着いています。その落ち着きが最初の一週間という学級もあれば、落ち着きを生かして、人間関係作りを上手に生かしている学級もあります▼5月になると、4月と違った学級の雰囲気が生まれます。それは、個々の子が自分の位置を自覚するからです。少しばかり、緊張していた心がほぐれ、本来の姿に戻るからともいえます。子供は、教師の時々の振る舞いを真剣にみています。見られていることを見ています。ですから、覚悟して個々のできごとに対応することが求められるのが5月です▼5月で大事にしたいのは、「子どもから学ぶ」という事だと考えています。一人一人の個性的な活動や学びの事実があります。その事実を、教師の学びに役立てることです▼1年生から2年生の引継ぎで、少し自分勝手であるという子がいました。ところが、その子を受け持った若い先生には、「人のことをよく見て世話好きな子」に見えたのです。その子は見守れていることに応えてがんばったのが4月だったのです▼日々の教室には、様々なできごとがあります。そのできごとに上手に対応する方法は、「思い込み」や「捕らわれ」にがんじがらめにならないことです。教育事実にこそ真実があり、そこから創造の芽が拓くからです。（吉永幸司）

さざなみ国語教室のホームページ　http://www.eonet.ne.jp/~sazanamikokugo
NPO 法人 現代の教育問題研究所のホームページ　http://kokugo-npo.com/index.html　ご覧ください。

国語さざなみ教室

畑中　翔太

隣の学級が図工の時間に描いた作品をその日の放課後に掲示していました。隣の学級が掲示していて自分の学級では掲示できていないと教育に差が出るので、急いで掲示しました。

次の日、教室で子どもを迎えると一番早く教室に登校してきた子が、「あ、飾ってある」と嬉しそうに自分の絵を見上げていました。「すきなものをかこう」という授業でした。私は「鳥さんとさくらんぼがとても上手に描けているね」と言いました。その子は「鳥が大好きなの。動物のぬいぐるみをたくさんもっているよ」と教えてくれました。さらに「ぬいぐるみをたくさん持っているんだね。動物さんと遊んでいるの？」と聞くと、「うんそうだよ。エサにチョコボールをあげたかったからお父さんに、お願いしたら、チョコボールを買ってくれたの」と嬉しそうに話してくれました。チョコボールをぬいぐるみにエサとしてあげているところが子どもらしくて、楽しそうだなと思いました。

今回「すきなものをかこう」という題材だったので、子どもの身の周りのことや生活の中での出来事が絵になりました。子ども自身が興味のあることなので進んで話すことができたのだと思います。話をすることで、その子が本当に鳥のことが好きなことや、お父さんにお菓子をおねだりしていることを知ることができました。子どものそうした背景を知ることを大切にしたいと考えていたので、話しあえてうれしかったです。今後の子ども理解に繋がると思いました。

絵はまだ文字を習得していない時期の１年生がコミュニケーションをとるときに大切な物であり、教師と子どもを繋いでくれることを知りました。興味のある題材を通して、その子が思ったことや作品に込めた思いなどをもとに話し合う活動は、伝え合う場として効果的だと思いました。また、より活動できることが増えてくれれば、次は子ども同士で話したり、その絵からお話を考えたりするなど、作品を通して言葉の活動ができるといいなと思います。

その子と話した時、絵を掲示してよかったなと思いました。ただ追いつく思いで作品を掲示していましたが、子どもたちの思いの詰まった作品であり、それをもとに会話をする時間が得られました。意図的に掲示や準備をして言葉と言葉で繋がれる場をつくりたいなと思います。

（大津市立田上小学校）

『今までの積み上げを受け継ぐ』

井上　滉斗

この春から、新規採用として豊郷町立日栄小学校に赴任し、早いもので、一ヶ月が経った。私が今年受け持つ学級は、男子十名、女子十名、総勢二十名の四年一組の子どもたちだ。この一ヶ月間、子どもたちには驚かされることばかりだった。

始業式の日、一大イベントの担任発表が終わり、次は初めての学習。子どもたちの輪に、入っていくことに不安な気持ちでいっぱいだった。しかし、その不安は一瞬で吹き飛ばされた。

「先生は何歳？」

「けん玉見せて！」（新任式の自己紹介で披露したため）

「先生何が好き？」

など、たくさんの質問の嵐だった。また、その後の学習も、よく話を聞いて、一生懸命取り組んでいた。すぐに私を受け入れてくれたあたたかさにうれしくもあり、本当に驚かされた。この子たちを大切にしたいという思いが自然に芽生えた瞬間だった。

体育のリレーの学習、バトンパスがうまくいかず、悔しくて泣いた子がいた。私が声をかけにいこうとしたら、

「どしたん？大丈夫やって」

「がんばってたやん！」

クラスの仲間がすでにやさしい声かけにしていた。そのあたたかさにまた驚かされた。

初めての新出漢字の学習、最初だからこそ丁寧に厳しく指導していこうと張り切っていた。しかし、ここでも驚かされた。どの子も『とめ・はね・はらい』を意識し、よく見て取り組んだことが伝わる字だった。また、マスいっぱいに大きく堂々と自信をもって書かれていた。それをどの子も当たり前にできることに感心した。

他にも、休み時間に次の学習の準備をする、下敷きをしく、手を洗うなど、学習規律や生活規律が当たり前に身についている。これは、今までの担任の先生方と子どもたちが時間をかけて、一つずつ積み上げてきたスキルである。ここまで育ててくれた先生方に感謝の気持ちをもち、この積み上げを受け継いでいくことが大切だ。できることはできるまま、さらに成長できるように指導をしていくことを心がけていきたい。そして、子どもたちが「この一年で成長できた」という自信をもてるように、まずは、安心できる学級作りから取り組んでいきたい。

（豊郷町立日栄小学校）

「難しい」音読指導

川部　長人

新年度が始まり、今年は小学二年生の担任をしている。毎年、四月の国語科では、音読教材が一つはある。私は今まで「音読指導」と呼べるような指導を行えてきたと思える自信がない。音読というと授業の初めにクラスのみんなで教材文を読んだり、音読カードを作って宿題として出していた程度である。音読は表現したり、教材内容を理解するうえでとても大切になってくる。今までの自分の指導をよりよいものに変えていくために、地道に取り組んだ実践を紹介する。教材は『風のゆうびんやさん（東京書籍・二年生）』で行った。

①全体での音読から個別の音読

今まで音読指導では、クラス全体やグループで音読することが多く、子どもたち一人ひとりの「声」を聞く機会がなかった。音読以外にも学習内容があり、音読だけにあまり多くの時間をとることができないと考えていたからだ。今回、子どもたち一人ひとりがどれくらい読めているか把握するために、一人で読む機会を多くとった。一人ずつ読ませてみると、クラス全体ではスラスラ読めていて音読が上手な子が多いと思っていたが、個人で見ると多くの課題があった。ぼそぼそと読んで何を言っているかが聞き取れなかったり、言葉の切れ目が分からずただただしく読む子、読み間違いなど、今まで子どもたちのことをみている「つもり」になっていて、ほとんど見れていなかったということを反省した。

授業の初めに一人で音読をする機会をつくったことにより、宿題での音読に対する取り組みが変わってきた。今までは全体の中で「なんとなく」音読していた子が多かったが、スラスラ読めている子やハキハキ読めている子の音読を聞いて「あんなふうによんだらいいんだな」といいモデルをもとに練習する子が増えてきた。個別に音読指導をすることは、時間がかかり手間に感じていたが、子どもたちの変化から今後も続けていきたいと思う。

②子どもたちへの言葉がけ

授業記録をとってみると、子どもたちへの声がけが「よかった」など抽象的になってしまうことがよくあった。教師がいい音読とはどのようなものか、はっきりできていないことがあった。「いい音読とは？」と子どもたちに聞いてみると、「大きな声で読む」「スラスラ読む」「気持ちをこめて読む」などたくさん出てきたが、まずはスラスラ・ハキハキ読めるように指導を行った。文章がスラスラ読めている子は内容理解も比較的よくできていると感じたからである。スラスラ・ハキハキよめるようになったら、次の段階として気持ちをこめて読むなど、音読を段階的に指導していくようにした。音読指導については第一歩を踏み出した段階であり、今後も子どもたちにとってどのような指導がよいか考えていくようにしたい。

（東近江市立能登川南小学校）

国語力の危機、私がやるべきこと

川端　由起

今年も２年生を担任することになりました。昨年度は毎週月曜日に、週末日記を書かせていました。昨年度は児童の全てが週末にあった出来事を書いてくれました。しかし、今年ある児童が「先生、ぼく土日ユーチューブしか見ていないから日記書けない」と言われハッとしました。３月にさざなみで提案させていただいた際、ある先生から「土日何も出来事がなかった児童は何の日記を書くのか」と言われたのを思い出したのです。よって今年は、毎週テーマを変えて作文を書かせていこうと思います。

また、最近本屋で「誰が国語力を殺すのか」石井光太志著が目に留まり、購入いたしました。本の内容を一部紹介すると、ある学校の研究会で、「ごんぎつね」の兵十のお母さんの葬式の場で親戚の人がお鍋を炊いているシーンを、小学生が「兵十の母親を煮ている」と真剣に話し合う場面があったそうです。また、「１つの花」で、父がゆみこにコスモスの花１輪をあげた理由を教員が尋ねたら、「駅で騒いだ罰として（ゴミ捨て場のようなところに咲く汚い花をゆみ子に食べさせた」という回答もあったそうです。筆者はそこで、絶句しましたが、私はそんな発言を児童から聞いた経験をしたことがないものの、同じ住む国のどこかで、そんな思いをもつ小学生がいることが悲しくかつそんな考えを持つ子どもたちを救わなければならない、と改めて思いました。

週末にユーチューブしか見ていない児童のことを取り上げましたが、昨今情報は大量にあり、溢れんばかりの情報を次から次に、整理したり、処理したりする能力はあるかもしれません。しかし、１つの物事の前に立ってじっくりと向き合い、そこから何かを感じ取ったり、背景を想像したりして自分の思考力を磨きあげていく力はないかもしれません。

「いなばの白うさぎ」の並行読書で昔話の感想を書くという学習をしました。本の感想を書くのは初めてという児童が多かったものの、まず本（絵本）のあらすじを書けない児童が多く、１日１名指導している状態です。本の内容を切り取り、そのまま書くと思っている児童がほとんどでしたが、指導すれば「そっか！」となんとなく理解できた状態になりました。

教科書の文章を正確に読ませることも大切ですが、単元を貫く活動を今年も多く取り入れることで、「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」という真の国語力を伸ばしていきたいです。

（草津市立志津小学校）

若葉の俳句

好光　幹雄

子どもたちと校庭を巡り若葉の数々を説明し、更に私が花瓶や生け花に飾った若葉を用意して２年生で俳句の授業。

Ｔ今の頃の葉っぱは、まだ大人の葉っぱではありません。

Ｃうす緑でやさしい色ですね。

Ｔはい、葉っぱもまだ柔らかく小さいです。こんな葉っぱを「若葉」と言います。

Ｃそれ、もみじの若葉や。

Ｔこの若葉は「楓」の若葉なので「楓若葉」と言います。

Ｃ　へー。そうなんや。

Ｔほら、楓若葉きれいでしょ。

Ｃはい、きれいですね。先生、こっちの若葉は何ですか。

Ｔこの葉っぱは、この前見たモクレンの葉っぱですよ。これも綺麗ね。

Ｃ先生、こっちの葉っぱは？

Ｃそれ、ドングリの葉っぱと違う？

Ｔはい、よくにてるけど、これは桜の葉っぱです。だから木の種類によっていろんな若葉の名前があるんだよ。黒板に書きますね。

柿若葉　楠若葉　藤若葉
草若葉　楓若葉　山若葉
若葉晴れ　若葉雨　若葉風
若葉寺　新樹　新樹光　新緑

教室を若葉色に染め若葉風がそよぐ授業を展開しました。

★若葉晴れおいしいべんとう柿若葉
★いい天気ピアノをひいてるつた若葉
★気もちいなさいごの日には若葉風
★いい天気かえで若葉きれいだな
★若葉風一点入れてうれしいな
★青い空元気にあそぶ柿若葉
★ふじ若葉なかまといっしょに大合しょう
★ピアノをひいてるわたしたち若葉雨
★葉っぱがゆれる春のすずしい若葉風
★青い空ひかりをあびる柿若葉
★いちょう若葉スカートズボンかわいいな
★五月下旬まだまだのびるふじ若葉
★青い空わたしとあそぶ若葉寺
★いい天気たのしくとぶ鳥若葉風
★つた若葉みんなでのぼるまたこんど
★いい天気元気にゆれるくす若葉
★青い空ぼくにわらってる柿若葉
★柿若葉といっしょにあそぶくす若葉
★青い空そよそよただよう若葉風
★若葉風ピアノの音がひびいてく
★バスケシュート一点若葉雨
★青い空元気にあそぶふじ若葉
★桜若葉元気いっぱいのびてゆく
★じめんから空からひかるいちょう若葉
★ピアノをねひいてるぼくは若葉晴れ
★スーパーマンぼくのマントに若葉風　幹雄

子どもたちの瑞々しい一句一句に、それぞれの個性が光ります。

エッセイ「若葉雨」

ゴールデンウイーク最後の日、私が毎月主催する句会の吟行で京都府立植物園を訪れました。雨に洗われた美しい薔薇、芍薬をはじめとした数々の花や若葉が印象的でした。こんな日に降る雨を俳句の季語で「若葉雨」と言います。

命あるものは雨に打たれ濡れるからこそ、生き生きとその瑞々しさを取り戻し輝かせます。ですから、雨が嫌いだなんて、そんなことを言ってたら、俳句の神髄を知らず出会えないかもしれません。

綴り方教育の提唱者にして日本の国語教育の真髄に多大な影響を及ぼした芦田恵之助は、人々から「恵雨先生」という愛称で呼ばれました。それは、雨が農耕民族である日本人の生活と心に、どれ程豊かな恩恵を与えているのかを知ればこそです。

日々、体験し感じたことを反芻するように自己の中で解釈し意味付け価値付け、明日を生きる糧にする姿勢は、綴り方教育も俳句の真髄も同じであろうと思います。

雨が降る。そぼそぼと、しとしとと、粛々と。

ですから、こんな豊かな若葉雨に打たれながら過ごせることは、私のような俳人にとってもこの上無い幸せ至極の境地なのです。

柔らかな未来に開く薔薇の夢
若葉雨命の讃歌彩りぬ　幹雄

（大津市立膳所小学校講師）

編集後記

▼四月例会（第四九三回）は令和５年度の研究主題の設定と活動計画確認が主な内容でした▼研究主題は「『言葉による見方・考え方を働かせる』」の実像をさぐる」という方向にしました。その根拠は、学習指導要領の国語科の目標である「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す」にあります。解説書の文言を借りれば、「言葉による見方．考え方を働かせるとは、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること」ということになります。▼言葉では理解ができても、授業や日常の言語活動では、「言葉による見方、考え方を働かせる」とは何なのか明確ではありません。それを求めるのが「実像をさぐる」です。よいい授業と考える過程で必ず手がかりがあると考えています▼研究主題との設定理由につい一て次の三つをあげました。一つはまもなく50年を向ける「さざなみ国語教室」が求めてきた道程です。機関紙創刊号の巻頭言「心臓のごとく」（倉澤栄吉先生）を読み返し、教室の子供の学びの姿が見える実践発表ができることを大事にすることを確認しました。二つ目は、令和５年度全国学力・学習状況調査の問題から見えたことを話題にし見方・考え方」について考察を加えました。三つめは「ごんぎつね」を教材に研究手法を共有しました。▼巻頭には、村上正市先生から玉稿を頂きました。深謝。

（吉永幸司）